

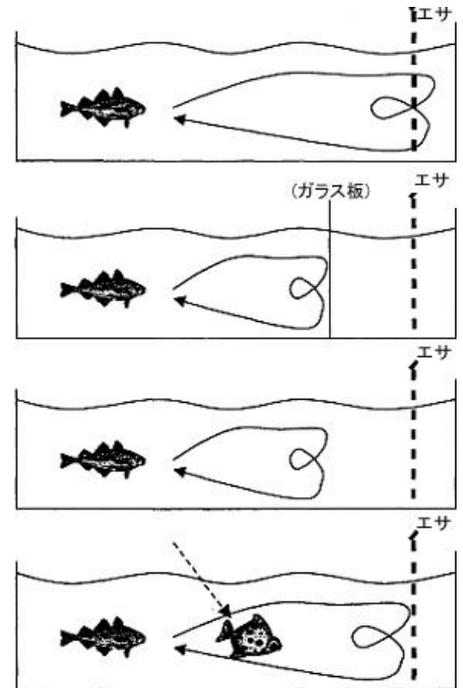
現状維持は退化と言われる、気負う必要はないが、ボ～としていると特殊詐欺の格好の餌食になる。警告としての三つのキーワードと関連を取り上げる。

1. 三つの警告

(1) 「カマス (の悲劇)」

ある実験、カマスという魚を水槽に入れた時に、図(表)-1のような奇怪な行動を取る、とのこと。

- ①水槽にカマスを入れて、右端の同じ場所からエサを落とすと普通に食べに行く。
- ②水槽に透明なガラス板を入れてエサの場所を遮断する。何回か挑戦するが諦めるようになる。
- ③そのガラス板を抜いてみるが、固定観念があるのでガラス板の位置から戻って来る。
- ④その中に別のもの(魚)を入れるとそれに吊られてエサの位置に行くことになる。



図(表)-1

(2) 「湯で蛙 (シンドローム)」

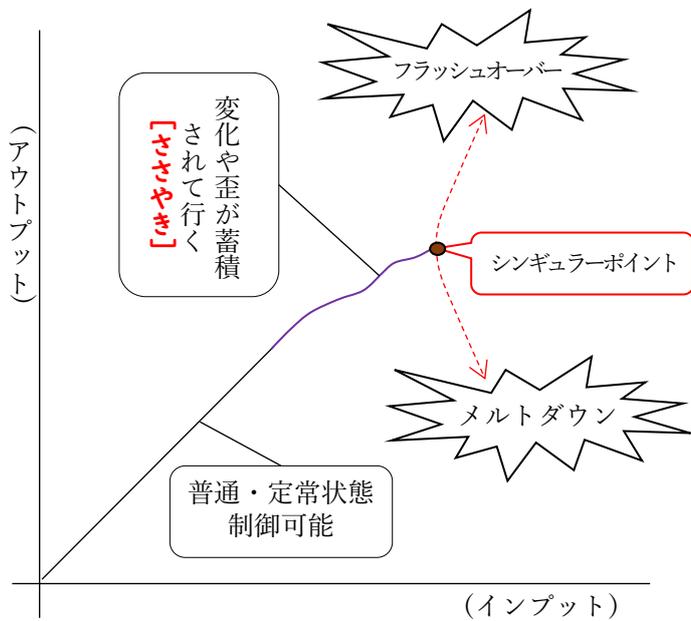
ある実践図(表)-2、熱湯に放り込まれた蛙はびっくりして湯から瞬時にピョンと飛び出す。ところが、水槽の中に蛙を入れて徐々に暖めて行くと、蛙は温度上昇に気が付かない内に心地良くなり眠ってしまうか、あるいは少しずつの変化に気付きつつも、飛び出すタイミングを失って、いずれにしても結局は湯で上がって死んでしまうという。



図(表)-2

(3) 「シンギュラーポイント または ティッピングポイント」

図(表)-3、前者「singular point」とは「特異点」のことを、後者「tipping point」とは「臨界点や閾値(いきち・しきいち)」のことをいう。例えば水であれば沸騰点のことを言い、水を徐々に加熱して行くと100度Cに達した時点で沸騰(水は煮えたぎり)して、水蒸気となって蒸発して行く。こうなってしまうと火を消しても、水を注ぎ足しても暫くは手の付けられない状態が続く。また、例えば、板を燃やすとなかなか火が付いて炎を上げないが、どんどん熱が板の中に蓄積して、ある瞬間にポット火が付く。ある状況から制御出来ない状況、それまでとまったく異なる状況に大きく転換する時点を「singular point または tipping point」(「運命転換点」とも言われる)という、物事の激変へのターニングポイントを説明する場合に比喩的に用いる場合がよくある。



図(表) - 3

私の身近な体験例として、次のようなことを経験する。お風呂の温度は四十数度が丁度いいと言われますが、冬なんかは体が冷え気味ですから43度C位だと熱く感じて湯船に直には入れない。しかし、温(ぬる)めのお湯に入って熱いお湯を足しながら湯船に浸っていると徐々に温度が高くなって来るが、50度C近くなってやっと熱くなったと感じるものである。それまでの間が大変気持ちのいいものである。もう一つ、以前に北海道へ行った時のことである。夜間の運転中トップギアで走行していたが途中から「どうもスピードが落ちたな、何だろう、どこかエンジンに故障(ノッキング寸前であった。)でも起きたのかなあ、おかしいなあ。」と呟きながらの出来事であった。何と緩い上り坂が長く長く続く山岳道

路を走行していたのである。初めての場所で夜間での運転であったことと疲れていたことが重なったのだと思うが、道路勾配が徐々に確実に増して行った事と周囲の景色の変化に気付かなかったのだ。結局は勾配に適応したギアチェンジが出来なかったのである。

## 2. ある武将の家訓

そこで思い浮かんだのが有名な柳生家——柳生宗矩（江戸時代初期の武将、柳生新陰流の剣術家）の家訓のこと。

【小才は、縁に出合<sup>て</sup>て縁に気づかず  
 中才は、縁に気づいて縁を生かさず  
 大才は、袖すり合<sup>つ</sup>った縁をも生かす】

小才・中才は「カマス・湯で蛙」大好きが嵌<sup>は</sup>まる体<sup>てい</sup>である。私達に降り掛かる雨風は居場所によって違えども太陽の光照射量は同じ、空気の酸素濃度は同じである。また昨今はスマートフォンを全国民が持ち、インターネットを通して膨大な言語・文字の情報が流れている、私は平等相が充満した機会均等の地球社会だと思っている。後は、利用するかどうか、必要性を感じるかどうか、活用の努力をするかどうかは、地球上80億人の一人である私自身の考え方一心に掛かっている。したがって、自分の思い通りにならないのはその人の努力がその自分が設定した希望レベルまで到達していない証左である、他人や社会の環境の斉ではない、ままたならないのはそれらが原因ではない。

=====

社会の価値観の少しずつの変化や緩やかではあるが確実に変わっている時流、時勢に気付かずに古い体質のままのほほんとしていたり、あるいは組織運営について「錦の御旗、この紋所、葵のご紋」を振り回し、殿様商売に安住し、あるいはおごり高ぶっていると、いかなる組織であれ、個人にせよ、ついには社会から市場から取り残されたり、他人から適当にあしらわれたり見放されたりしてしまうということである。

日常において様々な情報を得て、「心・言・行」の形にして生きているが、普通の定常状態においては、認識におけるインプットとアウトプットの間に齟齬・乖離は無く、一人の人間としてフィードバック制御をかけながら統率出来る状況にある、今の平穩無事が永遠に続く<sup>と</sup>確信を持って、疑う余地なく生きているのが人間である。ところが、外界・外部の環境や価値観が時々刻々確実に変化しているのにも関わらず、世の中を、他人様を馬鹿にするものですから、自身の固定観念と世の中のずれが目に見えぬ歪<sup>と</sup>なって身体を取り囲むようになる。世の中はままたらぬもので、歪<sup>と</sup>が積もりに積もってある時点で、原因が何であれ、引き金は何であれ、思いもかけなかった、予想外の、想定外の、経験したことのない異状・非常の事態が突出するものである。会社や組織で言えば破産や倒産だが、対人関係では互いに恨み・つらみの対象となり口論・喧嘩である、高じれば、殺傷の事件に進展である。個人に係る不慮の事故や特殊詐欺に引っ掛かってから気付いて慌てふためく状況も同様である。シンギュラーポイント・カーブにおいては「ささやき！」（警告）に気付くかどうか、それは不適切異変なのだという直感があるかという処が分かれ目となる。どうするか、人間は当然だが、生涯の中で『一人時間』が圧倒的に長い（多い）のだが、その時の、積み上げて来た考え方如何による。

個人の意見は小さいものである。人の能力や感情表現には千差万別があつて、根底には素晴らしい持ち味・個性・特技を持っているものの朴訥で急所をスバリと言えなかつたり、表現力が乏しかつたり、自信が無くオジオジしたり、集団・組織の中で必ずしも適切にタイミングよく発言・提案出来るとは限らない人が大勢いるものである。それぞれは個性と創造性を逞しくして多様な価値観と意見・提案の持ち主なのである。よく松尾芭蕉の「不易と流行」や相通じる「継続性と断絶性」のことを良く弁えて、社会の時流を敏感に感じている人達がいるのだ。もっと端的に言えば「小さな変化の創造主」がいるのだ。この「小さな変化の創造主」が、腹から声を絞り出して「ほら熱くなるよ、眠るなよ、早く飛び出せよ。」と声を上げているのにも係らず、「何とか長」を冠する組織のトップやライン中枢にいる人は、とにかく「何を言っているんだ何も知らないくせに、組織のことは俺が一番知っている、どこの何が危ないんだ！」と言って、耳を傾ける様子がなかったらどうなるのか。「小さな変化の創造主」が活かされないということになり、カマス・湯で蛙のルツボに自滅して行くことになる。至る危機を予測し勇気を絞って改善の提案をすると、一方で「過激」と言って排斥し、他方で「清流に魚住まず」と言って嘲笑するの世の常ではないか。

組織のトップに就く、あるいはライン中枢に入り「何とか長」の肩書を貰った途端に豹変するが如く、そこにしがみ付く亡霊に取り付かれて泥まみれとなり、硬直化して、カマス・湯で蛙・シンギュラーポイントの警告に不感症になり、おごり高ぶり、横暴を極めるのが昨今の醜い・恥知らずの輩である。

こういうことを学ぶと、これまでの私に染み付いた先入観・固定観念でいいのかという自省が自ずと湧いてくる、冒頭の“現状維持は退化である”という言葉に納得感が増す、一生一度の人生歩みを止めてはならないとつくづく感じるようになった。

(end)